



TITLE:

京大広報 No. 55

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 55. 京大広報 1971, 55: 204-206

ISSUE DATE:

1971-05-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209640>

RIGHT:

京大広報

No. 55

京都大学広報委員会

第2次定員削減に対する 要望について

本学では、4月27日開催の拡大部局長会議において、第2次定員削減問題に関して検討した結果文部・大蔵両大臣および行政管理庁長官に次の要望書を提出した。

国立大学教職員の第二次定員削減に
関する要望書

殿

昭和46年4月27日

京 都 大 学 総 長
京都大学部局長一同

科学の著しい進展に伴って、大学に対する国家社会の期待は近時ますます増大しております。さらに、今日の大学はみずからのあり方を深く改める課題に直面しており、その実効をあげるうえからいっても、現に定員不足を痛感している状況にあります。

しかるに、伝えられる第二次定員削減が国立大学にも適用されるとすれば、大学が当面している困難な事態をいっそう悪化させるにいたることは明白であり、わたくしたちは深刻な憂慮を表明せざるをえません。

ここに、わたくしたちは次に述べる理由により第二次定員削減の対象から国立大学教職員が除外されることを強く要望するものであります。

理 由

昭和44年以降、3年間にわたり国立大学教職員の定員削減が実施され、今回さらに昭和47年度以降の定員削減が行なわれるようですが、教職員の

不足が大学運営の障害となって、それが大学紛争とも重要なかわりをもっていることは、いま改革を検討する過程でもつぶさに痛感されるところであります。

学部学生の定員増に伴って、教職員定員の増加がなされたとはいえ、教養課程への教官増は僅少で、その補助職員等の増は皆無であり、また、大学院設置に当たっても教職員の定員はまったくなされず、その矛盾はその後の進学者の増加に伴ってますます拡大されています。そのために、研究補助者その他一般職員の仕事の負担量を増大させてきました。

つぎに、急速に進展しつつある学問研究の場は、研究スタッフの増加と同時に、高度化しつつある実験設備の導入を必要としており、しかもそれらの設備は大型化の傾向にあります。したがって、研究補助者、実験設備のオペレータ等は、不可欠の要員であり、それらの増員は緊急に必要であります。また、最近における情報量の急激な増大に伴って、その担い手となる図書関係教職員の充実が強く要求されるのも、当然であるといわなければなりません。このように大学教職員の充実の必要性が一般行政機関と異なる特殊性をもっていることを十分ご理解願う必要があります。

さらには、附属病院の基準看護ならびに人事院判定の2・8制度を完全実施するためと、医療技術の著しい進歩に伴う治療設備の増加と高度化によって、医療関係職員定員の不足は病院運営に重大な支障をきたし、その増加を必要としております。

これら助手・研究補助者層および医療関係職員などを含む大学教職員の定員は、それらが不可欠の存在なるがゆえに、その不足はやむなく大量の

「常勤的非常勤職員」を生み、そのことが現在深刻な事態をつくり出しています。

かかる現状においてこれらの教職員を対象に第一次定員削減が行なわれた結果、大学における研究・教育体制に深刻な打撃を与えましたが、今回また、第二次定員削減措置が行なわれるとすれば、大学の研究・教育機能の発展を阻害するばかりでなく、まひさせることも起こりうると考えられます。したがって今回は定員削減の対象から除外されるよう強く要望するものであります。

本年度の創立記念行事について

従来本学の創立記念行事の一部として5月中旬に園遊会、音楽会、講演会等を行なってきたが、近年における実績を検討した結果、本年度については一応園遊会を行なわないこととし、6月18日の創立記念日を中心に音楽会、講演会を実施することとなった。

具体的計画については現在検討中である。

(学生部)

月 曜 会 メ モ

第89回 (4. 12) 司会 玉垣良三会員

会員の交替について：法学部の福島徳寿郎、太寿堂鼎 両会員が高坂正堯教授、柴田光蔵助教授に、教育学部の兵頭泰三会員が本山幸彦助教授に交替、経済学部の本原正雄会員の出張中降旗武彦教授が代交される旨報告があった。今回は部局報告がなかったので、直ちに予定の議題「月曜会のあり方」に入った。

はじめに、発足より現在までにあった「月曜会のあり方」についての討論の概略を司会者が紹介した。その要点は、「月曜会は、各部局で当面している問題の解決に資する意味での情報交換を行ない、必要に応じて総長に問題提起をすることが出来る会として発足した。統一見解を出すことは原則として行なわず、総長をまじえて free talking をする semiformal な会とされ、大検委発足後も総長の強い要望もあって、大検委と相補的機能を果たすべく存続している。しかし、最近の出席率は大変よくない（約30%）状況が続いてい

る。」であった。

まず自由に問題点を出し合う中で、次の点が指摘された。

- 1) 京大広報の中に「月曜会メモ」があるが、free talking の中には記録にまとめ難いが大切である話がある。これは、会員個人が問題を考える際の background として役立っているが、それ以上に各部局に反映することはない。
- 2) 総長、学生部長等が出席して、上記のような free talking の中で出る意見を聞いてもらえるとういが、欠席続きではこのメリットもない。
- 3) 部局差が大きいことの認識はできても、その差が縮まるのに役立っていると思えない。
- 4) 当初は部局報告とその討論が多かったが、今は殆どない。無理してテーマを考えることになっていないか。
- 5) 現状では情報交換はさほど必要がなくなっており、集団としての目標が不明確になっている。これは、集団の危機と言える。
- 6) 出席率の悪さは、月曜会の利点としての肌身の communication のよさを感じている人の割合が低いことを意味している。「あればよい」程度で、無いと困るというものではない。

以上のように、現状のままで月曜会を続けることの意義はない点では理解は一致した。この際月曜会を解散するかどうかの議論に入る前に、従来以上に積極的に会を行なうと想定したらどのような問題、やり方が考えられるかを討論した。指摘されたのは、次の諸点であった。

- 1) 月曜会で取上げるテーマがなくなったわけではなく、たとえば、5月の中教審の最終答申への大学としての対処、事務と教育・研究の問題（総定員法、非常勤職員の問題等）がある。
- 2) 近々、教養課程改善案調整委員会の案が出るこれに限らず、委員会等からの案をチェックする場としての役割。
- 3) 総長が問題をかかえた時の相談相手。
- 4) 各部局で執行的な責任をもっている人の判断に役立つ面がある。（これについては、対策的になるとしたら、望ましくないとの意見があった。）

この後続いた討論を含めて、この日の討論をまとめると、次のようになる。

I) 一旦組織が出来たあとでは、当初の目標がなくなっても、組織の方はなかなか無くならない。月曜会に多少のメリットがあるにしても、現状はこのようなものだ。この際、月曜会を解散するのがよい。

II) 存続させるとするのなら、当初の原則から変わるようになるが、討論目標を明確に設定し統一見解を出す会にするべきだ。

II) については、統一見解を出すことを疑問視する意見、および統一見解を出すのなら、月曜会は解散して、それはあらためて別に考えるべきだとの意見があった。

この討論は、次回に引き続き行なうことになった。
(玉垣良三会員)

第90回 (4.26) 司会 桂山幸典

会員の交替について：4月1日付、工学部の桐柴良三会員より伊藤一郎教授に、農学部四手井綱英会員より松田良一教授に、4月14日付、数理解析研究所荒木不二洋、西田吾郎両会員より一松信教授、岩崎敷久助手に、4月26日付、結核胸部疾患研究所竹田俊男会員より寺松孝教授に交替。各部局からの報告はなく、前回に引き続いて月曜会のあり方について、とりわけ、存続すべきか否かにつき討論が行なわれた。今回は、欠席者も少なく総長の出席もあって討論は活発であった。

先ず、前回同様の議題で討論した概要について前回の司会者玉垣会員から報告があり、ついで月曜会が発足した初期の会の様子や、期待されていた性格につき説明が行なわれ、さらに、今迄に月曜会が果たしてきた役割が検討された。有形無形に大きな役割を果たしてきたという意見から、全く成果は得られていないとする意見まで、多様な意見が述べられた。月曜会を今後、存続すべきか否かに関して述べられた意見のうち、前回のメモに書かれていないものとしては：

Formalな会では出ないような意見が出る会であることに意義があるから、大学執行部の方の出席があれば現状のままでも、存続する意義が充分にある。広報に「月曜会メモ」としてのせられた記事だけからでも、他部局の考え方を知り、京大内に存在する多様性を理解するのにたいへん役立ったという声が会員外に多い。

緊迫した情勢の下では、報情交換の場として意義があったが、既にその必要性がなくなった。若い層の会員がなくなった時点から、意義が失われたと考えられる。自由な討論の場であるにも拘らず、問題点を底まで掘り起して討論できたとは思えない。

などであった。

こうして大多数の意見は、このままの形で毎週つづけるのは、負担が重いわりにメリットが小さすぎるということで一致した。しかし、直ちに解散すべきであるという意見と、開催頻度を少なくして続けようという意見とが伯仲していた。そこで総長に率直な意見を求めたところ「広報にメモとして出た記事からのみでも、有益な示唆が得られたことが多い。月曜会で話されることは、会員個人の意見ではあるが、それぞれ、所属部局の雰囲気や身につけた人々の意見であり、この膨大な京大の動向を把握するのに役立っている。月曜会で意見を聞きたい事がらは近い将来、たくさん出てくる予定であるし、また立場にとらわれない自由な意見を聞くことができる会は、何等かの形ででも残していきたい。したがって開催頻度は今迄より少なくしても、できるなら存続してほしい。」との希望が述べられた。

こうして一応存続することに意見が一致し、毎月第1月曜日に定例会を開き、必要に応じて他の週の月曜日にも臨時会を開くことに決定した。次回は会の運営方法、月曜会メモの執筆方法、その他について討論することになった。

(桂山幸典会員、東村武信会員)